「福山空襲の記録」などを契機とした景観について

備後福山における景観の「リアリティ」について その3

ON A LANDSCAPE MOTIVATED BY 'FUKUYAMA KUUSYUUNO KIROKU'

On 'reality' of a landscape of Fukuyama City in the center of Seto Inland Sea (Part III)

谷口興紀*, 小野 泰**, 榊原和彦*

Okinori TANIGUCHI, Yasushi ONO and Kazuhiko SAKAKIBARA

'FUKUYAMA KUUSYUUNO KIROKU' is collected writings by bombed out people of Fukuyama city by the U.S. Army Air Forces at Aug. 8 in 1945. Through descriptions of Fukuyama-city's landscape in bombed and flamed disaster, I try to make explicit reality of a landscape of the city. In such abnormal disaster, we may face to an unordinary but uncovered landscape compared with a daily familiar landscape covered by our own view. I characterize the later as 'actuality' of a landscape. The actuality of landscapes is in very close interrelation to knowledges and our representation. From zero degree of actuality to the extreme degree of actuality are discriminated in landscapes of the disaster by articulating writings of the disaster scene. Beyond and apart them by doubting them there seems to catch a glimpse of a landscape itself, namely 'reality of landscape' expressed as double exposed landscapes.

Keywords: landscape, bombing disaster, double exposures, Fukuyama, reality, actuality

景観, 空襲, 二重写し, 福山, リアリティ, アクチュアリティ

1. はじめに

福山の景観の様態の「もの」の連関の側面を、前稿で「景観のアクチュアリティ」と呼び、福山の景観の矛盾する様態の同時的存在性すなわち、「二重写し」的在り方を「景観のリアリティ」と呼んだ¹⁾。

これらの概念をさらに詳しく規定する。今、目の前に、山や川が在ると言うことは、その山や川に即して景観主体のわかりが成り立っている。そのわかりの成り立ちにおいて、景観対象の山や川が在ると言うことが実現していると言われる²⁾。もし、景観主体のわかりが成り立たないならば、山や川が在ると言うことが実現しない。山や川が存在すると言えない。景観主体から独立に、山や川が対象として、「もの」として在りえない。このように言い切ることに奇異な感を抱くかもしれないが、「もの(対象)」とは、「もの(対象)」として表象することであり、誰の表象かという「主体」の表象である。つまり、「主体」から独立に「もの(対象)」が在ると

しても、その背後に、「主体」がそう考えていることが隠れていることが指摘される³⁾。科学的測定においても、そこから出てきたデータが「主体」に提示されることによって、「主体」が、データの配列を「何である」とわかることによって、「もの」が在ると言うことが成り立つ。「主体」にとって「何である」とわからなければ、何があるかわからないので、「もの」が存在しているとは言わない。日常的な「ものが在る」ということ、日常的な「実在性」とは、このようにして成り立っている。言い換えれば、

我々は通常自己から物を見ている。いわば自己という城郭または洞窟から物を見ている。自己から見ると言うことは、いつも事物を単に対象的に見ることに、自己の「内」から「外」のものを見ることである。自己と事物の根本的な離隔の場で事物に対するということである⁴⁾。

* 大阪産業大学環境デザイン学科 教授・工博

** 福山大学建築学科 助教授・工修

Prof., Environmental Design Dept., Osaka Sangyo University, Dr. Eng.
Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Fukuyama University, M. Eng.

この「自己」についても、

「外」に対する「内」として、「外」への関係に於いて自己中心的である自己は、事物から遊離して自己自身の内だけに閉じこもった自己、常に自己に対してある自己である。そこでは自己は自己自身を常に自己の前に置いて、事物から離れた「自己」という「もの」としてみる。それが自意識の自己である。そこには自己という「もの」の形で表象が介在している⁵⁾。

我々が日常見ている山や川や町や建物などの事物もそれを見る自己も、すべて実在的ではある。そして、通常それらが実在的として受け取られる意識の場の上では、自己も、「もの」として見られる。景観の「景観対象」と「景観主体」との関係において、景観主体が景観対象を表象的に捉え、その捉えている景観主体をまた内なる自己が表象的に捉えるという、いわば二重構造をなしている。そして、この二重構造によって捉えられる景観は、我々が日常的に接する景観という意味では実在的景観であるが、景観そのものが我々の表象を介して、我々に呈する側面であるという意味では、間接的である。

それに対して、「景観主体」と「景観対象」が「もの」性や表象性を脱する在り方を考えることが出来る。事物が表象性を脱するとは、実在すると考えていたもの、不変的と考えていたものが、「仮のもの」という様相を呈することである。そのような場面は、一般に虚無の場と言われ、事物は、虚無の場において、外的実在とか対象とかいう性格のものではなくなる。そのことによって、事物は、主体によって考えられる表象性を脱する。そして、事物が表象性を脱すると共に、景観主体にとっては、自己が関わり合っている景観対象が、もの（対象）として存在しなくなり、見るものがないということになり、景観対象に対する景観主体ということがもはや成り立たなくなる。景観主体は、景観対象との関係で成り立つ概念であり、景観主体だけの独立な存在ということは意味をなさない。それに伴い景観主体を表象的に捉える「内なる自己」も意味をなさないことにより、自己の表象性を脱する。この辺りのことを、哲学的知見は、

自己自身の存在が事物一切の存在と一つに「無化」されるということが開かれる。つまり、意識場、「内」と「外」との離隔的な係わりの場が主体的に踏み越えられて、「内」と「外」との根底に一つの虚無が開かれるということである⁶⁾。

と言い、

その現時的虚無を突破して初めて、実在性は、事物一切の実在性と相共に、真に実在的に現れ得る。むしろ、「内」と「外」の離隔の場が突破され、そこから転換が起こり、はじめて、真に実在性に於いて現前する⁷⁾。

と言う。すなわち、「もの」や「主体」の日常的な実在性の破れる虚無の場が開かれ、さらに、その虚無の場を超えた立場が開かれることによって、質的に全く違った実在感が生じることを意味する。このようにして、表象性を二重に脱した景観は、我々の表象を介さないで在るという意味で直接的景観と言えよう。以下では、景観が「真に実在性において現前すること」を「リアリティ」と呼び、景観対象と景観主体とが離隔したまま、「日常的なわかりにおける実在性」を「アクチュアリティ」と呼び、これらの概念が生きた形で空襲時の景観の様態にかかわる様を明らかにし、福山の直接的景観とはどのようなことかを明らかにする。

2. 資料について

本稿で全面的に依っている三つの資料「福山空襲の記録」⁸⁾（以下では資料Ⅰと呼ぶ）、「続福山空襲の記録」⁹⁾（以下では資料Ⅱと呼ぶ）並びに「炎の中から（市民が描いた福山空襲の記録）」¹⁰⁾（以下では資料Ⅲと呼ぶ）の信頼性とその扱い方について検討する。

資料Ⅰの大部分は、昭和20・1945年8月8日に空襲を受けた人々が、30年後（昭和50・1975年頃）、当時の状況を思い出して書き下したもの（87篇）であり、資料Ⅱの大部分は、40年後（昭和60・1985年頃）に同様にまとめられたもの（100篇）である。その中に貴重な米軍資料の和訳（387～437頁）がある。資料Ⅱに文を寄せた人の中には、資料Ⅰを読んでいる人も見られる。

これらは距離的に離れた場所に住んでいる人々の記述がまとめられており、炎に追われる状況や時間が異なるという点で「福山の空襲」という言葉で表示を意図している一つの事柄の時空的展開である。例えば、空襲が何時始まったかについても、多様な記述が見られ、午後9時から10時30分にまで及び、また空襲の終了時刻は、9日未明にまで及ぶ¹¹⁾。米軍の資料（I-395）¹²⁾によれば、

8月8日（水）午後10時25分照明弾投下開始
午後10時37分爆弾投下開始
午後10時46分照明弾投下終了
午後11時35分爆弾投下終了

であり、最初に空襲を受けた地区の人の記述に「空襲を受けた時刻は、十時二十二分か三分です。」（I-286）とあり、整合する。また、広島県警察本部もこの時間としている¹³⁾。また、B29の来襲機数は、最も多いもので61機（I-306）と記述されているが、米軍資料（I-395）によれば、91機である。福山空襲は、二日遅れ（8月10日付け）で新聞に報道され、そこでは、60機となっており、米軍資料が明らかとなるまでは、「60機」がそれまでの「事実」であった。

記述の中で整合のとれないものに、「月」への言及がある。当日の正午の月齢は、0.5であり、新月なので月

は見えない。「立秋 新月」(I-174)と記述しているものが1篇あるが、その見えないはずの月への言及が3篇にある¹⁴⁾。しかも「月が美しくかがやいている。」と書かれたのは、30年後ではなく、空襲からわずか1年後の昭和21・1946年9月10日の日付があるものの転載であり、単なる記憶違いとは考え難い。この日付の月は、月齢14.2であり、ほとんど満月である。

これは次のように考えられる。「事実」は時空的に延長した物・事の連関により構成されている。時間連鎖という観点から、秒を単位とすれば、一分前の事柄と一分後の事柄は同じ時刻の事柄と見なせないが、時間を単位とすれば、同じ時刻の事柄と見なせる。一年前の8月にあった大きな事柄とその大きさを語ろうとすると、8月1日にあった事柄と8月31日にあった事柄とは「あれは、一年前の8月のことだった」という語りの中では、日付けの違いが捨象され、「一まとまりの現在」として語られることは可能である。というのは、語ろうとする事柄にとって、日付けの違いに意味がなく、出来事の違いに意味があるからである。出来事の違いの大きさに較べれば、何日何時何分ということは天文学的脈絡ならいざ知らず、語りにとってはその違いを区別することは無用なのである。8月8日が新月であることからさかのぼれば、7月24日頃は満月である。満月の夜または、その前後の月に照らされれば、

「間もなく空襲警報とともに上空に敵機だ。一軒のこらず消燈。だが行き届いた燈火管制も恥ずかしいまでに今宵の月はあまりにも明るく美しい。」(I-185)

という状況があり、さいわい、その夜は、福山を空襲することなく、敵機は去って行く。当時「警報発令」は日常的であり、人々は、「定期便」と呼んでいる。それが8月8日に「あたの火の海」に転ずる。

言い換えれば、資料Ⅰ・Ⅱは、文字化された記録ではあるが、研究者側が用意した設問やアンケートなどのフォーマットへの応答を集計したものではなく、また、空襲の観察記録でもない。本来的には、異常な事態としての空襲についての個人的な語りである。したがって、方法論的観点からは、これらの資料を分析的だけに使用することは適切でない。ここでは出来事の違いを際立たせる資料としても扱う。空襲に合った人々がそう書いたということは、確実なことであるから、人々が空襲時の状況について書いた対象的事実を並列し、当時の新聞や文献を参照しながら、対象的事実に反する場合にも、それらを捨て去るのではなく、そのことの意味を考察することにより、いわば景観主体の側にも踏み込んで行く。

資料Ⅲは、空襲にあった人々が、昭和51・1976年頃すなわち、30年後にその光景を絵に描いたものであり、状況の写真ではないが、状況の雰囲気映したものとして扱う。

前稿の「福山大水害」との関連では、

「大正八年の大水の時も恐ろしゅうて、どこへ逃げようかと思うて公園へ逃げたけど、その時と同じような音がゴオゴオして恐かった。」(II-163)

とあり、空襲は、恐ろしさという面で26年前の大水害の再来である。その「福山水害誌」の著者濱本鶴實自身は、福山郊外の疎開先から山越しに福山の空を望見しているが、市内の自宅の防空壕に避難させていた福山市史は焼失し、「防空壕は全く役に立たん。残念至極だ」とこぼしている¹⁵⁾。また、前稿で縁起絵巻について触れた韜光寺(とうこうじ)も全山炎上している¹⁶⁾。

3. 「福山空襲」前後

福山の大火としては、享保7・1722年12月26日入り川の南側の町をほとんど焼失1159軒(後世「福山大火」と呼ばれる)と享保19・1734年2月4日入り川の北部を焼失1089世帯とがある¹⁷⁾。

日本の大都市の大半の空襲を終えた米軍にとって、次の爆撃価値と目標は、中小都市の工業地区の破壊である。

6月29日 岡山空襲、7月1日 呉空襲

7月31日 ビラ投下

ビラには、近いうち空襲する町として、水戸、八王子、郡山、前橋、西宮、大津、舞鶴、富山、久留米、高岡、長野と共に福山が挙げられ、軍事施設、軍需品を製造する工場を破壊すると述べられている(現物の写真(I-XX))。

8月1日 ビラ投下

このビラには「日本よい国、紙の国、8日の晩には灰の国」と書いてあったという説(I-211)(この内容に従って、当日避難をした人がある(I-244 -263))があり¹⁸⁾、また、

「8月1日午後9時30分頃、敵機来たり、照明弾投下、東町北部、奈良津方面に投下され、写真を撮ったものと思われる。」(I-319)

という記述や、8月7日に「日本よい国 紙の国 7月8日 灰の国」と書いてあるビラがまかれたという記述(II-327)もある。

8月6日 広島に原子爆弾投下¹⁹⁾

8月8日 福山空襲

爆撃密度は、計算上は、1m²に1本の割合、1人当たり3本の割合でふりそそぐ²⁰⁾。地上では、「三尺おきに焼夷弾」「焼夷弾が一尺おき」「畳一枚に二本も三本もの焼夷弾だ」「1メートル置きに焼夷弾」となる。爆撃方法は、西の山から時計廻りに周辺を爆撃し、その後、中心部(旧市内)を十字に、まず東から西へ、次に南から北へと集中的に爆撃した。爆撃効果は、市街地焼失面積314ha(市街地の焼失比率約80%)、全焼家屋10,179戸、被災人口47,326人(全人口に対する被災率約80%)。図-1に被災地域図を示す。

図-1 被災地域（白抜き部分、資料1の図を1987（下部）・1991（上部）発行の地図に写す。①：炭焼ヶ鼻（図-7の撮影位置と方向）、②：福山城、③：図-6の撮影位置と方向、④：図-4の撮影位置と方向、⑤：工業高校）

4. 空襲時の景観

切迫した状況の中でも、その状況からの脱去の瞬間に「眺める」ということが生じる。例えば、

「井戸水を頭からぶっかぶり、その上に濡れむしろを被って、家族の後を追うつもりで寺町通りを東へ走る。燃える両側の火勢が強く、炎が両側へ吹き出している。呼吸を止めて一気にぐり抜けてみるとその向こうは数軒は燃えていない。次の高橋さん宅の土間に火が廻っている。その炎の中に電話器²¹⁾がくっきりと見えていたのが印象的だ。」（11-50）

このような「眺める」という瞬間の、共通の景観対象に、国宝であった福山城（鉄覆山朱雀院久松城）がある。187篇中56篇が福山城の炎上について言及している（図-3、また図-4は、図-3の描き手が居た辺りから、市制50周年を記念し、昭和41・1966年に再建された福山城を撮る）。「福山城」という一つの「景観対象」をめぐる、その炎上を「恐くて」見ない者、炎上がどのようなかを記述する者、炎上の現実的経過に自己の喪失や世界の喪失を重ね合わせて見る者など、その見方の内容は多様であるが、これらの「眺め」は、「石橋の下に逃げ込んで」、「土手にすわりこみ」、「縁側にすわらせ

てもらい」、「堤防の上で」など切迫の状況から、一時的にしろ脱去して、ほっとしたと考えられる時に行われている。以下に、それらの代表的なものを挙げる。

① 炎上経過の記述

「橋の上から市中を見れば全市炎に包まれ、火の海と化していた。応援隊が来援しても全く手のつけ様はないのである。その時である。天下の名城と称せられた福山城は天守閣の頂上から焼けだして、漸次下層に向かって焼失したのであった。」（1-313）

② 様々の思いの記述

とに分けられる。②のタイプは、二つに分けられる。

イ) 福山城の炎上を認めない、それを見ようとしらない。

「私達は、松濱の方の幅二メートルくらいの溝川の石橋の下に逃げ込んでいました。主人が『お城の天守が燃えよるど!』と言ったりしていました。私は恐ろしくて見ようとしませんでした。」（11-255）

ロ) 福山城の炎上を認め、それと何等の関わりを持つ。このタイプは、さらにいくつかに分けられる。

a) ただ、呆然と見つめる。

「やっと橋を抜け、小森（津之郷町）の辺りまで逃げのび振り返ってみると市街地は猛炎に包まれ、そのまった

だ中に福山城がくっきり浮かび、それも瞬時にして火の塊となりました。私達親子は、そのような光景をただ呆然とみつめるだけでした。」(I-145)

b) 呆然と見つめながらも、「綺麗(きれい)」、「うつくしい」と感じる。

「その時お城が燃えていましたが、後で良枝が言うには「あの天守閣が燃えながら崩れ落ちて行くのが、とっても綺麗で、何とも言えなかった・・・。」と、いうことです。」(I-218)

c) 「映画のシーン」や「夢(の中のできごと)」として見る。

「ふと市内を見ると火の海でした。公園のお城がまっかになって、ザーと音をたててくずれおちるのを、この目で見たんです。夢じゃなあー。夢じゃ。夢にちがいないと思うてな。何べんも自分の体をつめてみたんです。」(I-245)

「へたへたと土手にすわりこみ、焼けていく福山の町をふりかえりました。一面火の海です。「あっ、お城が！」

見ると、天守閣の窓が火をふき出しています。やがて火に包まれ、上の方からくずれていくのを、私はゆめのなかのできごとのように見ていました。」(II-202)

d) 「悲嘆のあまり声もでない」や「泣けてしかたがない」

「・・・近くのお宅の縁側に座らせてもらいました。

その時です。お城が燃え出したのが、ちょうど見えしました。「あ々お城が燃える」と、つぶやいたら、涙がワーッと出てきて、泣けてしかたがありませんでした。」(II-311)

e) 福山のシンボルの喪失であり、「福山のみおさめ」。

「途中ふと仰ぎ見れば、約三百五十年にわたって福山の歩みを見守ってくれた五層の福山城天守閣も一夜のうちに姿を消していた。」(I-299)

「これで福山もみおさめじゃと、お城の焼けるのも、天守閣が焼けおちるのも、みとったんです、堤防の上で。」(I-121)

f) 「日本の敗戦」、「歴史の喪失」、「一時代のおわり」を感じる。

「お城は、下の方から燃えはじめ、はげしい勢いでうず巻く様に火焰をあげ、天守閣の姿をそのまゝに紅蓮の炎につつまれて燃え上っており、それは、一つの時代の終わりを身を悶え火を吐きながら天に知らせている様でありました。

「お城が焼けている、お城が燃えている。」と人々も思わず叫んでいたけれど、当時、お城は福山の象徴であり、大袈裟に言えば、城下町に住んでいる者達の、心のよりどころの様な存在であったことを、あらためて感じました。

紅蓮の炎につつまれ、はげしく燃えるお城を見ながら

私は、これはいけん、もう駄目だと、人には言えないながら、その時はじめて日本の敗戦を予感しておりました。」(II-60)

g) 「祖国の運命」を見る。

「本庄の芦田川堤防上まで来ると、久松城の天主閣炎上がくっきりと夜空に浮かび上がり、名状し難い悲しみといかりが交錯し、大きな何者かの力によって、くずれ行くであろう祖国の運命を暗示されてしばし佇む私でした。」(I-333)

h) 「これでこの世も何もかもおしまいだ」と見る。

「私はどうしようもない苛立ちと興奮の中に呆然と立ちつくしていると、北の空が急に明るくなったので振り向くと、あのなじみ深い福山城の天守閣が真赤に焼けて火炎と共にくずれ落ちるところでした。「ああこれでこの世も何もかもおしまいだ。」と悲愴な気持ちでしたが、・・・」(I-137)

「時々焼夷弾の落ちる大きな音がし、頭を手でおおい、身体を小さくして祖母と母とは二人で逃げまわっていたが、その時、「福山城をのこしてくれるのかな。」と祖母がさびしそうに言ったのだそう。お城が照明弾の明かりでとてもきれいに見えたと言っている。間もなく、お城も火を吹き出し、母の心はなんだかさびしくなり、胸がいっぱいになって、「もうこれでおしまいだ、なにもかも・・・。」と思ったそう。」(I-346)

このように景観対象と景観主体との関わりのも多様性について景観の「アクチュアリティ」をキーワードとして次節で論ずる。

5. 景観の「アクチュアリティ」

一夜あけて、焼け野原となった福山市街地を眺め、人々は、あらためて戦争を実感する。そして、

「国際法を無視して、焼夷弾を投下し、罪なき良民を殺傷するとは、誰彼の区別なく悲憤慷慨したものであった。」(I-172)

しかし、8月8日の新聞に奉戴されていた開戦の詔書には「国際法遵守」という文言が欠落している²²⁾。

戦争の初期には、

「何故米英を相手に戦争せねばならないのか。その理由を明確に知る者は少なかった。従って当局者等が、鬼畜米英と罵倒しても市民にはそれがピンと響かなかった。

そこで当局者は、米英を代表する猿人形を作り、市内の主要道路の傍らに建てた。福山東小学校から西方三百メートル隔たった路傍の人形には、『鬼畜米英と思って、これをなぐれ』と、立て札に書いて標示した。だが、みんなこれを眺めて素通りしていた。戦争の初期に一般市民の敵愾心が燃え上がらなかったことは、これがよく証明している。」(I-170)

敵愾心をあおるためには、目に見えない敵を見えるもの

にする必要があった。藁人形のように、擬人化し、なぐれる程に等身大化することが適切であると考えられた。しかし、市民に対して効果は無い。もし、B29の搭乗員を目の当たりにすればどうであろうか。米軍資料では焼夷弾投下は高度4000mからとなっているが、「高度を下げながら」という記述やB29の搭乗員が見えたという記述が散見される。それらを以下に挙げると、

「・・・満天を焦がす紅蓮の炎は真昼のように大地を照らしていた。己の姿が地上に大きく浮かび上がる。B29の巨体が、木々を震わせ、山をかすめるほど低空から襲う。一機だけではない。次から次へ数十機が、荒れ狂った牛のように襲いかかる。逃げて、逃げて、全身にパイロットの目を感じて足がすくんでしまう。家までは、ほんのわずかな道程だ。それがどうにも長い。本能的に身を物影に寄せながら帰ったため、思わぬ遠まわりもした。」(I-269)

「爆撃している飛行機が機首を下げるたびに、全部が全部、自分を狙っているようで、『もう駄目だ』と何回思ったことか。」(II-139)

「おそろおそろ空をふりあおぐと、町の燃える炎を反射し、銀色の機体をくっきりと描き出したB29が超低空で迫り、帽子をかぶった飛行士の姿が見えるではありませんか。まだ十八才であった私は、「うわー」と思い、バリバリと焼ける稲の中をはぶさったまま、前に後ろに逃げまどいました。」(I-194)

「星空にB29の姿がくっきりと浮いて見える。呉爆撃で福山上空を通過したときに見たものより数十倍の大きさに見える。飛行眼鏡をかけた搭乗員の姿がちらっと見えたほど超低空飛行で爆撃していた。むらむらと憎しみがこみあげてくる。」(II-72)

等である。機体の動きを自分と関連付けるだけでなく、その搭乗員を視認することは、焼夷弾の落下や火災という物理的切迫状況を、人間の意志の介入したものに転化させる。そこではじめて、感情(敵愾心)が湧く。

しかし、実際に搭乗員が見えるであろうか。人間の顔の認知距離は、約1kmである。B29は、高射砲弾の上を飛んでいたという記述もある。一方では、B29が機銃掃射をしたという記述があるが、3月10日の東京大空襲では、米軍は爆弾をより多く積むため、13丁の機関銃と8000発の機銃弾をはずしている。その結果爆弾搭載量は一機あたり平均6トンになる²³⁾。福山空襲の場合も一機あたりの爆弾搭載量を米軍資料から計算すると6トンとなり、火器がはずされていた可能性が高く、機銃掃射の可能性は低い。ここにも上述の「月」の場合のように、整合性がとれない記述が現出している。当時福山の天津野(現在日本鋼管製鉄所本部の辺り)に「福山海軍航空隊」があり、そこを、B29ではなく、時おりグラマン戦闘機が来襲して機銃掃射をあげせるなどしていた(II-288)。

「機銃掃射は、海面すれすれに目標を直撃し、さらに急上昇・急降下しつつ銃撃を繰り返す。白い弾跡が二本、しぶきを上げつつ海面を走る。」(I-266)

4000m上空ではなく、海面すれすれにまで下りてくると、搭乗員が見える可能性は高い。それがB29による空襲と一つに語られたのであろう。つまり「見たこと」とそれを「語ること」との間に「知っていること」が介在するのであろう。

景観のアクチュアリティを高めることは、知識を通じてであり、物・事の連関を追求することであると前稿で述べた。知ることには、物・事を分けていく側面がある。かつては、よく知っていた街も、一面の焼け野原と化すると、ここは何処あそこは何処と見分けることができない。逆に目の前の遺体に残る、数センチの焼け残りの「ゆかた」片の模様から身内の者を見分ける²⁴⁾。

空襲は、福山市民にとって、コントロール出来ない「火」であり、すべてが烏有(うゆう)に帰する場面である²⁵⁾。烏有に帰する場面では、分けられるべき対象が無くなる。分ける「私」も無くなりかねない。分けることが成り立たず、知るということが成り立たなくなる。また、火炎の輻射熱のため眼が焼けて、一時的に視界がかすむということも生じる。

一方、米軍にとって焼夷弾攻撃は、精密爆撃に代えて日本の街を効率よく破壊するために考えだされた空爆方法であり、コントロールされた「火」である²⁶⁾。福山市民にとってのあの町この町は、米軍にとっては、「市街地域(都市)1.08平方マイル、市街地域(工場)0.12平方マイル、市街地域(総計)1.20平方マイル」と分けられ、福山市民にとっての一望千里の焼け野原は、「市街地域(都市)の破壊地域は、0.80平方マイル、市街地域(工場)の破壊地域は、0.08平方マイル、市街地域(総計)の破壊地域は、0.88平方マイル」と分けられる。(II-400)火炎の明るさのため目視爆撃をした爆撃手は、市街地域の2つの堀(芦田川と入り江)によって福山市域を容易に見分けている(II-421)。レーダー影像写真や空爆後に航空写真が撮られる。

福山市民は、灯火管制をひく。しかし、4000m上空の米軍から見れば、灯火管制は完全に出ていない(II-403)。炎に追われる市民は、暗闇へ暗闇へと逃れる。しかし暗闇は、爆撃手にとっては、次に炎上させるべき爆撃目標である。福山市民にとって忘れられない惨を、米軍の司令官は、「そんなものは忘れることだ」と部下に指示する²⁷⁾。爆撃目標となった福山の市街地1.2平方マイルは、4000m上空の明視距離30cmでは、13.5cm×13.5cmの中に入る。B29の搭乗員は、福山に着陸して地上から福山を見ることはないの、空襲される側の炎の海も、彼らにとって、このサイズにおける出来事である²⁸⁾。

このように空襲の様態から距離をおき、炎上したか否

かという特定の観点からのみ見て、その惨を忘れることに努めることを通じて、景観対象としての空襲は、景観主体から離れ、景観主体の外にあるものとなり、「空襲」という実体になる。ひとたび主体から切り離されると、人がそれに向かって操作する「対象」になり、それらを測る数値が導入可能となり、破壊地域80%と計量化され、効率という点から測られるものとなる。

空襲という一つの物・事において、二つの相反する景観主体の立場、一方は、空襲される景観主体、他方は、空襲する景観主体によって、二つの分け方・在り方が成立し、空襲される側にとって、語り得る言葉が見つからないという点で、その景観のアクチュアリティを零度であるとするならば、空襲する側にとって、その景観のアクチュアリティは、数値で表現でき、計量化できるという点でアクチュアリティのもう一方の極端であると言える。言い換えれば、景観の「アクチュアリティ」は景観対象と景観主体とが未分化の状態を零度とし、そこから、景観主体と景観対象とを分け、さらに景観対象の様態を細かく分けていき、その極端として数値化して分けるという方向で高まる軸と一般化できよう。一方、この軸にはのらないもの、すなわち、景観主体の帰属している「祖国」や「この世」の「おしまい」という烏有への立ち至りの記述がある。この点について次節で論ずる。

6. 景観の「リアリティ」

「私」の生存に関わる切迫的状況において、ひたすら合理的に判断し、自分の家に留まり、日頃の防空訓練にしたがって、落下する焼夷弾の消火に努めようとしても状況の切迫さが、合理的判断の限界・無意味さを引き起こし、「私」の生存が疑われ、その向こうに超えようとする場を現すのが図-2である。この図の説明に、

「ドンドン、焼夷弾の落ちる中を田んぼにやっとのがれ、ふとんをかぶって、ふせて敵機の落とすのを見ていました。川の中で手を合わせ、念仏をとなえる人が沢山いました。」(111-21)

図-2 川や田に避難する人(111-21)

とある。「私」の生存を「仏」のような超越的なものに任せる様である。しかし、この図像は、そのままでは来迎図にも見える²⁹⁾。合掌して一心に念仏を唱えている人々の図像がそのままに、右斜め下の田んぼの中に伏せている衆生(その中の一人がこの図の描き手である)を救いに来ている菩薩達の如くである。

このような超越的な立場に移ることは別にして、「烏有」から「有」へと立ち戻る場面がある。焼けてしまったと思っていたものが、焼け残っているという場面である。すなわち、

「銀行は無惨にも焼土と化してはいましたが、がんじょうな金庫だけは、大丈夫でした。そのどっしりとした偉容に大きなものを感じ、感激したものでした。」(11-98)

また、

「やがて芦田川河畔に出ると、山の手の家、只の一軒家が思うにまかせて燃えていた。東側土手がくっきりと、その向うに残った人家が、市中の火の海で夜目にひときわ強くうつし出されていた。その火の中に学校があると思うと、『もう駄目だ』と思った。避難者とすれ違い乍ら、長い橋を渡る一足、一足、力ない足どりで、東側土手を川下へと下って行った。」

景観対象の「烏有」に加えて、景観主体も半ば「烏有」に帰していることが、その足どりに現れる。しかし、

「不安の内に周辺部の残った家の中に、どうやら学校らしい形状の黒い建物が、川下のほうに見えてきた。

行くにつれいよいよまがもなくなり、校舎の絵でにちがなかった。もう引きつけられる思いで急いだ。学校の前に来た時、確かに学校は残っていた。それが実に力強く、天に向かってつっ立っている様に見えた。」(11-335)

普段の校舎が、質的に違った「校舎」に見える。また、「さあれ、焼跡に立ったとき玄關脇の書斎の辺りに、結婚記念に作った書棚が蒸し焼きのようになってそのままの形で立っているのを見た。永い間、苦勞して求めた五十三冊の平凡社の百科辞典等と共に、四角な形のまま崩れもせずに立っているではないか、それに手を触れただけで無惨にもガサガサと崩れ去ったのである。疎開させておくのだったと、云いようもない無念を感じ今更、失ったものへの未練に後髪をひかれる思いであった。」

それから数時間後、

「工業高校は焼け残ったとの噂を聞いた。行く先もなく文字どおり焼け出された親子三人、兎も角、工業高校へ避難しよう、辛うじて持ちだした夏の掛け蒲団をもち、リュックを背負い、長女の手をひいて工業高校まで辿りついた。時の鈴木豊喜校長の勇気と英断で焼失を免れた工業高校の校舎と寄宿舎を眺めた時、蘇生の思いがしたものだった。」(11-174)

自分の職場やその周辺が烏有に帰し、また景観主体も烏

図-3 福山城炎上の絵（資料Ⅲより）

図-4 ライトアップされる福山城（1995.8.）

図-5 山越しの福山炎上の絵（資料Ⅲより）

図-6 山越しの福山の夜空（1995.8.）

図-7 福山の夜景（1995.8.）図の右の赤い円の中心の白点が福山城

図-8 福山の夜景の変形（図-7を加工）

有に帰する状況に瀕した後、日常的になれ親しんでいた物が、一変して質的に違った物に見え、単なる対象的な「もの」ではなく、金庫が「金庫」のままでありつつ、また、校舎が「校舎」のままでありつつ、偉容と力強さを備え、景観主体を蘇生させる契機として働く。「金庫」に於いて、「金庫」に即して「私（主体）」が在り、「校舎」に於いて、「校舎」に即して「私（主体）」が在る。「金庫」や「校舎」の实在性に於いて、また、「金庫」や「校舎」の实在性に即して「私」の实在性が回復する働きを示している。

「私（主体）」に相對して、「私（主体）」の向こうに金庫や校舎が金庫や校舎として在るという在り方ではなく、日常的な金庫や校舎ではないものとして、「金庫」や「校舎」の实在性即ち「私」の实在性という直接的な在り方である。言い換えれば、景観対象の实在感と「私（景観主体）」の实在感とが同時的に一つである。

「烏有」がそのまま「有」であるという場面がある。

「私は小さいからよくわからなかったけど、焼け野原になって遠くまで見通せるので、自分が大きくなった様な思いがした記憶があります。」（I-154）

「烏有」としての一望千里の焼け野原の市街地を、遮るものなく遠くまで見通しつつ、それをそのまま「新たな有」すなわち、自分の「成長」の証と見る。

一日も早い復興が目指される。

「その夜（筆者注：8月15日敗戦の夜）から焼け跡に電灯が輝きはじめた。」（I-96）

都市計画がなされ、瓦礫や焼土で川が埋められる。山が削られ、海が埋められ、昭和36・1961年には、工業の雄、製鉄所の進出が決まる。それから34年、空襲から50年、炭焼ノ鼻から福山市街を撮った夜景が、図-7である。市域が明るく輝き、周辺の山並が暗く低い。この図は、復興の証であり、空襲を受けた地方都市の現時点の夜景の一つを呈していると筆者には受け取れる。しかし、景観のリアリティは、「私に見える」ことで尽きるわけではないという立場からはどう言えるだろうか。

「最後に母は言った『工業高校の南の橋は、都市計画によって無くなったけど、ほんまに戦争は終わったんかしら』と」（I-352）

「工業高校の南の橋」とは、「母」があとからあとから飛来する敵機の下を、火の海の間を縫うようにしてやっと落ちついた田中の幅二メートル位の川の橋である。その橋の下で、ここなら大丈夫と、放心したような状態で、B29が、兵営を空襲するさまをながめていた。しかし、そのうち、練兵場の火薬庫に火が入ったから、遠くに避難するようにとの伝令が伝えられて、今度は、芦田川の堤防づたいに本庄まで逃げねばならなかった（I-350）。それから30年後においても、この「母」は平和という安息の場が再び逃れねばならない場に転変することを危惧

する。「有」が「烏有」ではないかという危惧が表明されている。この「母」の立場からは、図-7を、そのまま図-8の如く、福山はなお燃えていると見る事が要求される³⁰⁾。

このような観点から、福山の景観の見方が出てくる。空襲による福山炎上の空を山越しに描いた図-5の位置を同定し、その位置から夜間に撮影した福山の現在の夜空は同様に明るい（図-6）。個々の照明は、スイッチを入れたり切ったりすることが容易でありメカニズム的にはコントロールされていると受け取れる。しかし、「ヒートアイランド」という言葉が示すように都市の電力消費量は、上昇する一方であり、省エネルギーが社会的に叫ばれ、個々の機器が省エネルギー化を実現していても、全体としては増エネルギーであり³¹⁾、電力会社は、その需要の傾向を見越して石油を燃やし続けねばならない。また、需要を引き起こす個々の市民は、ライトアップを求めることはあっても、ライトダウンを求めることはないというのが大勢である。つまり、両者が止める方向にコントロール出来ない燃焼が、この夜景に移されており、図-7はその燃焼を写している。復興の証をそのまま、燃焼であると「二重写し」に見るという「母」の立場は、物事に相反する矛盾的属性を求めることであるが、矛盾したものは、表象することが出来ないし、「言葉」で発しても観念として成り立たない。しかし、その見方を契機として、筆者にも、復興の証や繁栄と見え、また、そのまま、その否定的側面としての燃焼であるとも見える。そのどちらも实在的である。つまり、ここでの「景観の在り方」は、「何である」こととその否定として「何でない」という如き在り方との両者が成り立つということである。「何である」ということを思い浮かべることは出来るが、その否定とを同時に表象的に思い浮かべることは出来ない。にもかかわらず、景観に即しての实在感がある。つまり、表象や観念を介在させず、福山の景観に直に接することであり、「景観のリアリティ」が現前しているという在り方であると言えよう。

7. おわりに

「空襲」のような景観主体にとっての危機的な状況の記述を契機として、直接的景観としての「景観のリアリティ」の現前という在り方の構造を明らかにした。すなわち、日頃親しんだ日常的な景観が何らかのきっかけ（例えば「空襲」のような危機的な状況や目に見えてゐるものは本当かという疑い）から「仮のもの」という様相を呈し、さらに、その「仮のもの」という虚無性からの転換としての矛盾する景観的様態の同時的存在を、「もの」としての「自己」を忘れて凝視するという構造である。

「景観から景観図へ」の方向」の景観研究においては、

研究者が「景観主体」を「被験者」として捉え、その応答を数える。その場合、数えている「研究者」自身の景観対象への応答は、数に入れることは禁ぜられる。しかし、結果の考察の段階で、研究者は、景観主体と化し、自らの景観対象への応答を手がかりにし、まとめや結論を導かねばならない。暗黙のうちに景観主体＝研究主体という側面が含まれる。「景観図から景観への方向」の研究においては、一層このような側面が大きい、その場合でも図や写真などを提示し、視知覚の間主観化を図る必要がある^{3,2)}。しかし、厳密に言えば、間主観性も、やはり主観性を基にし、表象性に基づくから、さらに、この主観性を、上述のような構造により脱することへと進まねばならない。

注

1. 谷口興紀他：備後福山における景観の「リアリティ」について、日本建築学会計画系論文報告集第443号、1993. 1.、111-120頁、同：「福山水害誌」を契機とした景観について(備後福山における景観の「リアリティ」について その2)、日本建築学会計画系論文報告集第470号、1995. 4.、121-129頁、
2. 西谷啓治：ニヒリズム、西谷啓治著作集第8巻、創文社、1990.、147頁
3. 西谷啓治：宗教とは何か、西谷啓治著作集第10巻、創文社、1989.、136頁
4. 同上、13頁
5. 同上、14頁
6. 同上、22頁
7. 同上、25頁
8. 福山空襲を記録する会編発行：福山空襲の記録、昭和45年、福山市民図書館蔵、巻末に、死没者名簿、資料編がある。
9. 福山空襲を記録する会編発行：続福山空襲の記録、1985、福山市民図書館蔵、巻末に、死没者名簿、資料編があり、その中に福山空襲部分の米軍資料の和訳がある。
10. 福山市教育委員会：炎の中から(市民が描いた福山空襲の記録)、1990、福山市民図書館蔵
11. 1945年8月10日付けの毎日新聞には「午後10:59から9日午前零時頃までに脱去」とある。
12. 記号：(I-211)は、資料Ⅰの211頁、(II-327)は、資料Ⅱの327頁を示す。
13. 広島県警察史編さん委員会：広島県警察百年史下巻、広島県警察本部、昭和46年、311頁
14. パートレット・カー：戦略・東京大空爆、光人社、1994とその訳注によると、当時の日本の防空観点には、レーダーへの認識が不足し、「月明を利し」(201頁)という考え方が存在し、3月10日東京大空襲について「ラジオ東京は・・・『あの星月夜の悲劇・・・』」(198頁)という言い方をしているが、「東京天文台の資料によると、3月9日から10日にかけての月齢は24.9、闇夜であった。」(201頁)また、1945年3月6日付け朝日新聞にも「敵は、月明を利し」という表現が見られる。しかし同年3月13日付けでは、空襲の状況を分析し「天候の良否、昼間と夜間、月明と闇夜の別のごときはほとんど問題とされることなく、・・・」とあり、この頃までに夜間空襲の累積結果から「月明」とは無関係と認識されていることを示す。しかし、一般の人々の月明イメージは改まっていなかったであろう。
15. 「新市にいた濱本鶴賀は、新市から福山空襲を見て、炎が天高く燃え上がると『お城が焼けている。お城が焼けた』とこぼしていたそうです。後に、光南町の防空壕に避難させていた貴重な資料、自分自身が精根を尽くして執筆した福山市史などが焼失したのを見て、大変、くやしがり・・・」(II-238)
16. 前稿の「谿光寺」は、「谿光寺(とうこうじ)」の誤り。
17. 福山消防史編集委員会編集発行：福山消防のあゆみ、昭和54年、353頁、福山市民図書館蔵
18. しかし、警察は、市民にその情報に従って行動することを厳にいましめ、その情報が広まらないためビラは警察に届けるように、隠し持っている処罰するといわれていた。しかし、時の福山警察署長の記述によれば、死者142名という記憶と、負傷者は比較的僅少であったという思い(1991年8月8日現在では、死者354、重軽傷者864名)に基づいて「死傷者が他都市と較べ僅少であったのは、一・二月位前から数回空襲予告のビラが撒布されたこともあって市民も十分準備ができておったことと、市内の不要の建物を撤去していたこと、それに老人・子供の郡部へ疎開に努めていたことなどもあろう。」(I-307)としている。この142名という死者数は、資料Ⅱで、県庁への報告ノート控えの発見に基づいて242名に訂正されている。(II-385)
19. 8月7日昼頃、福山公会堂に、町内会長、副会長が集められ、広島市の新型爆弾の被害との関連で、警報が鳴ったら、とにかく防空壕へ逃げ込めという訓辞があったという記述(II-250)があり、照明弾投下による真昼のような明るさを、新型爆弾と考えて、防空壕に留まり続けて惨に遭うという記述も見られる。
20. 1994年8月30日開館の福山市人権平和資料館の説明資料によれば、投下爆弾の種類は、炸裂型・膠化ガソリン(ナパーム)爆弾(AN-M47A2)(重量約32kg)、4.035発、およそ500㎡に6発の割合で投下された。信管は触発型。炸裂と同時に火災を発生させ、消火体制を混乱させ、後続機に目標地点を指示する機能を果たす。次いで、AN-M50型焼夷弾を内蔵した収束爆弾(AN-M17A1、重量約211kg)である。強い貫徹力をもつように6角筒に改良されたM50型焼夷弾(重量約1.8kg)110本を内蔵した収束爆弾である。高度4000mから投下され、時限装置により、M50型焼夷弾(わが国では小型エレクトロン焼夷弾とよばれていたようである。)が散開する。およそ10.5メートル四方に1発ずつ落下するように調整され、上空1500mで散開した。つまり、1㎡に一本の割合でM50型焼夷弾がふりそそいだ。
21. 当時の電話の普及率は、1/17(世帯数約12000戸の内、約700戸)(II-328)であり、1町内組内25戸に2台あるか無いかであり、持つ家が稀であり、特別の家であり、電話器は特別のものであったのであろう。
22. 当時毎月8日は、宣戦の詔書を掲載する日であった。また、1995年8月11日、8月25日付け朝日新聞は、徳川侍従長の談として、日清、日露、第一次世界大戦の際の宣戦の詔書に明記されていた「国際法遵守」という文言が、第二次世界大戦の詔書に欠落したのは、時の首相の強い意向によるという証言を載せている。
23. パートレット・カー：同上、136頁
24. 資料Ⅲ24頁
25. 鳥有(うゆう)に帰す[「鳥有」は、漢文で「いづくんぞあらん」と読み、まったく無いの意。]火災にあい、すっかりなくなる。焼失する。金田一京介他編、新選国語辞典新版、昭和51
26. 米軍の報告書によれば、「計画と実行の対比。実行と当初の計画の間には、本質的な違いはなかった。・・・全体的に見て、作戦はよく計画されていた。」(II-427)とある。
27. パートレット・カー：同上、140頁
28. ちなみにB29の搭乗員の日常生活が展開していたB29のサイズは、翼長43.083m(>32.94m：ボーイング727の翼長)、全長30.195m(<46.715m：ボーイング727の全長)である。パートレット・カー：同上、40頁
29. 来迎図(らいこうず)：平安中期からの浄土信仰に基づく仏画で、西方浄土の阿彌陀如来が衆生を救うため諸菩薩即ち聖衆を従えて人間世界へ下降するさまを描いたもの。(広辞苑)
30. 図-8は、図-7をカラーコピー機のカラークリエイト機能のベースカラーの変更で、レッドを指定してコピーしたもの。
31. わが国の電力消費について平成6年において、今後年率2.2%の伸び率で伸びるとされており、平成15年度末の電源構成比は、火力61.5%とされている。1995年度版電気年鑑分冊年報、社団法人日本電気協会新聞部事業開発局、1994年、76頁。
32. 間主観性(intersubjectivity)：複数の主観に共通に成り立つこと。私が指にけがをしたとする。そのとき、私の指の肉体的状態-皮がやぶれ、肉がさけ、血が流れているという状態-は、だれの目にも明らかであり、したがってそれは間主観的である。科学は間主観的な事象を対象とする。(哲学事典、平凡社、昭和51、271左頁)

(1995年10月10日原稿受理、1996年6月7日採用決定)